

中学校の特別支援学級における 学生ボランティアの変容に関する考察

—大学生が目指す教師像に着目して—

阿部 雅子

1 はじめに

公立小中学校の近隣の大学生が、学習支援ボランティアとして定期的に各校に派遣される事業が定着しているケースは、全国的にもそう珍しいものではなくってきている。特に、特別支援教育におけるボランティアの要請は年々増えており、現場の人手不足の問題を解決し、教員を志望する大学生のインターンシップの場ともなり、双方のニーズを満たすシステムとして広がってきた。しかし、支援体制の実態に関しては、山本（2013）らの調査¹でも論じられているように、派遣される大学生側と派遣校側の調査結果から課題が指定されてきた。

特別支援教育における学生ボランティアに関する学術論文は、数多く発表されているものの、そのほとんどは派遣大学生の立場から考察されたもの、大学側のシステムを論じたもの、児童生徒の実態について述べたものが中心であり、依頼者側の公立小中学校の特別支援教育を担う教員の声が調査対象となったものは、管見のかぎり見あたらない。

調査対象である神奈川大学のボランティア学生の支援を受ける、近隣の公立小中学校に勤める特別支援学級の担任をインフォーマントとして、支援学生及び、その支援を受ける生徒がどのように変容するのか、事例を基に論じていくのが本論の特徴である。神奈川大学の学校ボランティア制度は、学内の交流システムが長年の間に定着しており、大学に近い公立中学校を中

心に、高等学校や小学校への派遣、行政区と連携して行っている放課後塾や青少年の居場所等への派遣が実施されている。そのうち、特別支援学級にも定期的に10名前後の大学生が派遣されている。学生たちは、特別支援教育の体系的なカリキュラムを学部で履修しているわけではないが、現場に立たされる混乱の時期を乗り越え、生徒とのコミュニケーションを深めながら、大きな成長が見られるようになる。

年度末には、派遣された大学生、大学関係者、担当区の行政関係者、受け入れ校の校長と担当教諭、卒業生教員、学生らが集まって、学内で教育研究交流会、及びラウンドテーブルが行われる。そこで世話になった方々へ感謝の気持ちを込めて、学生の報告会が行われる。その学校ボランティアの報告会では、これまでのリフレクションをまとめた体験録を発表し、それぞれの立場で意見を述べ合うグループ討議を行う。この毎年行っている報告会は、大学生の変容を確認する良い機会として定評がある。

本論では、そのような場で学生が自分の体験した支援活動を振り返り、その場を提供した学校の校長、担当教諭、派遣側の大学教員、制度を支援する行政関係者らに、自分の実践結果を「語る」こと、及びその「語り」に関して、受け入れ校の教員が返す「返答」にこそ、この制度の真実があることを見出した。現に大学生の支援活動が終了し、締めくくりの場では出会う学生たちと担当教諭の間には、共に支援の場で共有した現場感覚がある。世話になった師であ

り先輩である教員にどのように体験の感想を語り、その学生の語りを、教員はどのように受け止めているのか。教育実習では体験できないリフレクションに、学生の大きな成長が見られる。

各学校では、週1回程度、年間10回～20回ほどの支援活動が行われる。しかし、このような限られた時間の中では、教員との対話や振り返りの時間を設定することは困難であり、それを不安に感じていたり、どのように対処してよいのか分からないと訴えたりする学生は多い。その中で、支援初期に感じていた不安をどのように克服し、いかに自分の成果を発表するまでに至ったのかを、教員の側から考察していこうとするのが本論の特徴である。

2 研究の背景と目的

公立小中学校に派遣された学生ボランティアは、一般級、特別支援学級に配属され5月～7月、9月～2月までの期間、大学の授業や試験のない日に1回につき約3時間程度を近隣の公立校で過ごす。その中で児童生徒に学習支援を行ったり、宿泊体験や遠足の補助を行ったり、部活動指導や学校行事の支援を行ったりしている。学校によって支援の内容は異なるが、概ね学生一人あたり年間に週1回のペースで10回～20回程度の支援活動を行っている。大学2年生～4年生が中心で、教育実習を行う前の事前体験として支援に入る場合もある。

A中学校の場合には、校長面接後に特別支援学級(4学級)に配属され、1日につき2名程度の大学生が20名～30名ほどの生徒の中で、担任の指示を仰ぎながら個別の学習支援を行ったり、体育の時間などに全体の試合等の補助を行ったりして、その場に応じた支援を行っている。

5,6月頃は、何をしてよいか全く分からずに生徒との距離を感じながらも、遠巻きに見学していた学生も、年度の終わり頃には、生徒の

進学や新級をお祝いするお別れ会の席で、成長した子どもたちの姿に涙するまでに成長する。そうした変化は、すぐにできるものではない。日々の支援の場を積み重ねる中で、互いの信頼関係が構築されて、はじめて実現する。

例えば、児童生徒の暴言や失礼な物言といった障害に関わる表面上のそぶりや、感情があらわになる身体的な身振りといった見かけには一切とられなくなり、一つ一つの言動には必ず理由があり、その原因を汲み取る関係づくりを行うことが、自力でできるようになる。

そこに、ボランティア学生の真の学びが生まれる。児童生徒と信頼関係を築けた学生は、担任の側から見ても、その後の支援活動にはっきりとした違いが見られるようになるという。その違いとは、具体的にどのような違いなのか、それは学生の資質・能力によるものなのか、それとも大学教育や派遣先の教員の支援によるものなのか、現場で起きている事実から分析していくこととする。

この研究の目的は、特別支援学級における学生ボランティアの変容を、大学生が目指す教師像に着目して明らかにしようとするものである。

3 研究の方法

平成30年度にA中学校に派遣され、特別支援学級のサポートに入った大学生(2年生～4年生)がまとめる年度末のレポート²の中から、変容が感じられる部分を抜き出し、次の5点について考察を加えるものとする。

- (1) 学生は派遣当初よりどのように意識が変わったのか
- (2) 意識が変わった要因は何か
- (3) 生徒からの影響はあったのか
- (4) 教員の影響はあったのか
- (5) 教員の影響があった場合、それはどのような要因から影響を受けたのか

また、A中学校特別支援学級の主任教諭B(A

中学校主幹教諭) に半構造化インタビュー³を行い当時の学生の様子を振り返ってもらいながら、同じように上記の5点に関して意見を述べてもらうことにした。さらに、学生ボランティアの派遣制度に関する、総合的な感想もインタビュー項目に盛り込むこととする。

4 先行研究データと比較した調査校の実態

寺田、秋元らによる調査⁴では、教員と学生の間での意思疎通の不足による反省の記述やマイナス面の指摘がみられたということが明らかになっている。その記述は次の通りである。

- ・ 打ち合わせの時間がなかなかとれない。
- ・ 連絡不足を感じている。
- ・ 担任もどのような手だてがいいのか分からないような状態で、具体的な支援の在り方を伝えることができていない。
- ・ 毎日忙しくしているので、せっかく来てくださっている学生さんに、具体的に役割を頼んだり活動してもらったりする計画が立てられず、とりあえず各クラスに1時間間ずつ入ってもらっている状態である。
- ・ 校内における特別支援の確立が十分にできていない。
- ・ サポーターの方によりかなり意識の差がある。高い意識を持って入っていただければ、子どもの学ぶ意欲や人間関係にもプラスに働く。しかし一方で、1週間に1度という短い時間での支援になると、どうしても子どもの中の「お客さん意識」がぬぐえず、「気心の知れたお姉さんの存在」で終わってしまう。それを防ぐには、やはり連携をきちんととり、何をどう支援してもらうか学校側からの方針を出さなければならないし、学生さんにもそれだけ重要な役割を担っているということを自覚してもらわなければならない。などが挙げられている。

また、黒住・前川(2008)⁵の小学校の管理職・担任を対象とした特別支援教育に関するアンケート調査によると、学校側が次のような実態に関してしっかり対応を考えていかないと、学生がかなり厳しい状況に立たされることになることを指摘している。

- ・ 管理職をはじめとする学校側の支援員の役割への理解不足、支援員の存在への否定的評価、管理職と担任教師との関係上の問題、教師の業務の忙しさなどが、支援活動を行う学生に緊張感や精神的混乱を与えていたことを指摘している。教師とのコミュニケーション不足、知識やスキル不足、要求されることに答えられない罪悪感、教師との意思疎通ができないことによる苛立ち、「支援者」というイメージへのこだわりと現場で求められることのギャップによる葛藤などがあげられ、学校内の支援への意識の不調和、支援員としての役割の曖昧さ、支援体制の不十分さなどにより、学生支援員がバーンアウト寸前になったり、活動を中止したくなったりするという背景があることを指摘している。

下線部は、どのような学校においても発生しやすい現象と捉えることができる。しかし、A中学校ではこれら課題を克服し、学生たちが充実した時間を過ごすことができたと言っている。果たしてA中学校では、マイナス面をどのように克服してきたのだろうか、また、A中学校に派遣された学生は、どのように派遣初期を乗り越えてきたのか、またどのように担任からの支援を受け、どのように生徒との相互作用を行うことができたのだろうか。まずは、学生ボランティアが年度末に支援活動を終えて、ボランティア通信に載せた感想から学生の変容を見ていくことにする。

5 学生の省察（学生ボランティアの感想⁶より抽出）

（1）学生は派遣当初よりどのように意識が変わったのか

- ① 活動初日は、こちらから声をかけても応えてくれないことがあったが、諦めずに積極的に生徒とのコミュニケーションを意識して接していたら、徐々に生徒の方から声をかけてくれるようになった。
- ② 一人の生徒から声をかけられて、自分が返すことはあっても、自分からその生徒に声をかけて返ってきたことはなかった。しかし、しばらくたってから、鼻をすすっていたので「ティッシュ欲しい？」と聞くと「欲しい。」と返してくれたので、とても嬉しかった。成長や変化を見ることができ、とても幸せに思う。
- ③ 始めたばかりの頃は、生徒に対してどの程度の支援を行えばよいのかわからず、授業中や休み時間も立っているだけの時間が多く役に立てていないと感じていたが、普通の講義では学ぶことができないことや、実際に体験することで気がつくことなどもたくさんあった。
- ④ 特別支援学級の生徒に対しての知識はほとんどなく、どのように関わったらよいのだろうかと不安を抱いていた。しかし、特別支援学級だったからこそ、どのように生徒と向き合うべきなのかということを学ぶことができたと感じている。

（2）意識が変わった要因は何か

- ① 生徒から先生と呼ばれ笑みを浮かべて近寄ってきてくれたこと。
- ② 生徒との対応でうまくいかないときに担任の先生からアドバイスをもらい、生徒の気持ちを考えて接することが必要だとわかったと

き。

- ③ 生徒と向き合うことを避けていたときに、担任の先生から、「ただそばにいてあげるだけでもいいのです。生徒に寄り添ってあげてみて。」という温かい言葉をもらったときに、自分が生徒から逃げてはいけないと強く感じた。
- ④ 自分が帰るときに「先生次いつくるの？」と声をかけてくれる生徒もいて「今日も来てよかった。」と感じたとき。

（3）生徒からの影響はあったのか

- ① ある生徒の数学を個別に担当していた際、「あとはこれだけで終わるから頑張ろうね！」と言ってしまった。一見、生徒を励ます何の変哲もない言葉に見えるが、その“これだけ”という言葉に反省した。自分は大学まで勉強してきた過程があるのでその問題は自分から見ればこれだけに見えたと思うが、生徒にとってはその問題はとても難しく“これだけ”ではないかもしれない。仮にその問題を生徒が難しいとっていて、先生から「これだけだよ！」と言われたら、きっといい思いはしないだろう。生徒が「難しくてできない。」「もうやりたくない。」といった時に先生が「いいからやってみなよ。」等のことを言ったら、生徒はますますできないのという感情が増えてしまう。そういう時には、言葉と行動で生徒の学習がしやすいようにしようと思う。

（4）教員からの影響はあったのか

- ① 一人の生徒が騒ぎ出して止まらなくなってしまったときに、自分が止めようとしてもなかなか止まらなかったが、先生がそばに寄って「どうしたの？」と優しく聴くと、その生徒は騒ぐのをやめた。聴くという態度を示した声のかけ方が良いということ学んだ。生

徒に注意をするときは、「～しない」などの否定的な言葉を使うのではなく、「～しましょう」などの肯定的で優しい言葉を使うよう心がけてくださいと指導していただいたこともあった。

- ② 担当していた先生が、「自分ができるところまで頑張ってみて。」という声掛けを行っており、他の生徒と同じように活動しなければいけないわけではなく、生徒たちにあった指導や声掛けが大切なんだということを学ぶことができた。
- ③ 「生徒はみんな褒めてほしいと思っているから、出来ていたときはしっかりと褒めてあげることが大切で、私はそこを意識して生徒と接しているよ。」と先生から言われ学ぶことができた。
- ④ 学習しやすい環境は言葉や行動だけでなく、授業の雰囲気づくりや教室の使い方、物の準備もとても重要で、そういう点が特別支援学級は一般級よりも大切だということを教えてくれた。

(5) 教員の影響があった場合、それは自分にとってどのような気づきとなったか

- ① 障害があるということも理解して生徒一人一人に合ったサポートをしていくことが大切であると実感した。ここで学んだことは将来自分が特別支援学級を任された際や、また一般級での指導にもつながるものであると思うので忘れることのないようにしっかり自分の心に留めておきたい。
- ② 声の掛け方や生徒の小さな変化にも気づくことができる力など、自分にはまだ課題があることが分かった。
- ③ しっかり生徒の気持ちを考えて接することや生徒が何を求めているのかを考えていく必要があると感じた。

6 学生のリフレクションを考察する

今野（2016）は、特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査⁷で、次の点を明らかにしている。

一点目は、これまで障害に対して持っていたイメージや、大学での座学から得た知識が、学校現場での指導に触れることにより、実際の指導と明確に結びついた点である。

二点目は、学生と児童生徒との距離が縮まり、子どもの成長、変化を実感することができた点である。

また、土居（2012）⁸はリフレクション（反省的思考）が教育実践の場において重要な位置を占めてきていることを指摘し、教科の知識などの言葉で明示化された明示知に対し、教師が児童とどう接するかという知識（暗黙知）を取り上げ、学生ボランティアにとってのリフレクションの必要性が非常に高いことを指摘している。また、学生ボランティアがリフレクションをするには、プロセスレコード（一般的には看護実習において相互作用過程を明らかにするためのもの）を採ることを推奨している。そしてリフレクションを目的として、経験されたことを言語化する「再構成」を利用して、児童との関りの場面を分析することの意義を論じている。

そして、特別支援教育において、次の3点は大変重要なリフレクション行為であるという。

- ①児童の言動を読み取る。
- ②自分の反応の妥当性を確かめる。
- ③自分の言動が他者に与えた影響を振り返る。

この3点のリフレクション行為については、今回特別支援学級に派遣されたボランティア学生による体験レポートの中に見出すことができた。

①-S1 に示した下線部の部分である。

さらに土居は、<リフレクションを目的とす

る再構成を次の①～⑩の“問い”形式のプロセスレコードによって一層深化されることを分析している。

この“問い”を特別支援教室の子どもと対峙した学生ボランティアの“問い”と照合させてみると、見事に一致し非常に興味深い結果となった。

- ① どうしてこのような結果になってしまったのだろう。
- ② あの時の児童の言動が気になる。
- ③ 私は十分に児童の思いを受け止めていたのだろうか。
- ④ 思っていたよりうまくコミュニケーションが展開したのはなぜか。
- ⑤ 突然、児童の思いがけない発音に戸惑ってしまった。
- ⑥ 児童のパニック状態などにどう関わったらよかったのか。
- ⑦ 私のかかわり方はこれでよかったのだろうか。
- ⑧ なぜ児童の思いに気づけなかったのだろうか。
- ⑨ 初めて児童が心を開いた対応をしたのはなぜか。
- ⑩ かかわりのきっかけがつかめなかった自分を反省したい。

生徒たちはいま、何を考えているのだろう、どうして感情的になってしまっているのだろう、何を伝えようとしているのだろう、深く考えるようになりました。そうして、うまく対処できなかったとしても、近くで生徒の意見を聞いてあげる、生徒の気持ちを汲み取ろうとする行動に変化してきました。

すると、生徒たちは少しずつではありますが、心を開いてくれるようになったり、自分の気持ちを表現してくれるようになったりと変化してくれるようになりました。

これらの経験から、生徒と真剣に向き合う、情熱を持って接することの大切さを学びました。このことは、決して特別支援学級の生徒に限ったことではないと思います。

むしろ、特別支援学級だったから、一人一人の向き合える時間があったものの、一般級では一人一人と向き合う時間がそこまで確保できないでしょう。そんな中で自分の気持ちを表現できない生徒や、悩みを抱えている生徒たちに寄り添うことができるかが大切になっていくと思います。

少しでも生徒の成長を手助けすることができるような存在になり、そしてまた自分も生徒とともに成長できる存在になれるよう頑張っていきたいと思います。

①-S 1

引用 神奈川大学 心理・教育研究論集 第43号 神奈川大学教職課程研究室 2018 2017年度 『学校ボランティア通信』(横浜キャンパス) 2018年2月17日発行

※文章は全文から一部を抜粋したものであり、文言に関して学校独自に使っている表記を一般的な言い方に変更している部分がある。

①-S 1 に示したこの学生の気づきは、土居が示した特別支援学級で重要なリフレクシオン行為、及びリフレクシオンを目的とする再構成の問いとほとんどが重なる。1年間のボランティア活動を通して、学生自身が、悩みながらも自分の関わり方を省察し、どのように生徒と向き合ったらよいか、特別支援学級の子どもたちと過ごした時間の中で学びながら、自分でしっかり答えを出しているのである。

公立の学校では、一般級における配慮の必要な子どもも増えている。教師になる前に特別支援学級でこのような体験をした学生が、多くの子どもたちを理解し、救うことになることは間違いないだろう。多くの大学教育の教職課程の中に教員養成の一つの方法として、特別支援教室の児童生徒と交流する機会をつくっていくこ

とは、かなり有効な方法であると考える。

それでは次に、なぜこの学生が下線部のような気づきに至り、生徒の気持ちを汲み取ろうとする行為に変化したかを探っていきたい。ここには、本論の本題である「学生と担任教師との相互作用」が起こす「学生自身の変容」といった重要なコアの部分が見られる。

次の②-T1に示された下線部は、受け入れ校の担任教師から受けた助言から、この学生が学び、その学んだことを素直に受け止めて実際に実践してみたところ、生徒の反応が少しずつ変わっていった。という事実が語られている部分である。

前項の5(2)意識が変わった要因は何か、で示した③の学生は、実は①-S1を記述した学生と同一人物である。記述の前段では、担任教師から受けた助言を次のように述べており、再度考察を加えることにする。

生徒と向き合うことを避けていたときに、担任の先生から、「ただそばにいてあげるだけでもいいのです。生徒に寄り添ってあげてみて。」という温かい言葉をもらったときに、自分が生徒から逃げてはいけないと強く感じた。

②-T1

上記の下線部の時系列を整理すると次のようになる。

- ① 教室にじっとしてられず、教室を出てしまう生徒や些細なことでパニックになり大声を出してしまう生徒がいる。
- ② そのような生徒に自分自身が向き合わなければならない時がある。
- ③ どうしてよいか分からないし、先生にたよってばかりの自分がある。
- ④ 自分の力で生徒を落ち着かせることができない。自分の力ではどうにもならない。
- ⑤ 生徒と向き合うことを避けよう。
- ⑥ 担任の先生から助言をもらう。

⑦ 逃げてはいけないと内省する。

この学生にとって、「そばにいただけでいい。」という助言は、心強かったに違いない。問題は、静かにさせることでもなく、落ち着かせることでもなく、そばにいて寄り添うことであったことを、担任教師によって気づかされたのである。

このように、学生ボランティアは、担任教師から学ぶことも多く、いかに自分の学びを力量形成につなげていくかは、実は担任教師の力が非常に大きいのである。

7 担任教師の助言と学生の気づき

いよいよ学生のリフレクションから実証されている教員からの影響について、A中学校特別支援学級の主任教諭Bのインタビューを分析していくこととする。A校の特別支援学級は4人の担任が受け持っているが、Bは主任でありどの担任の動きも掌握している。学生ボランティアとの関りに関しても、広範囲に語ってくれることを条件に、総合的に判断して述べてもらうこととした。

(1) 学生は派遣当初よりどのように意識が変わったのか

急に変わるということはないですが、ただ、本当に最初はみんなメモ帳を持ってきて、後ろから授業を見るみたい。私たちが最初はそういう行為に違和感を感じて、「メモは要りません。生徒は誰も近づきませんよ。」と声を掛けました。距離感が遠いかな？と感じ、じゃ、「あなたはこの子の学習、例えば「計算がちょっと苦手なので見てください。」ということ、こちらが言って座ってもらうということから始めました。子どもも学生さんも最初はそうだと思うんですけど、誰についていかならないし、

勝手な言葉も言えないだろうし、それでもよく来てくださるなと思いますし、やっぱり困ることも多いだろうなと思いますので、「じゃあこの子についてくれ。」とか、「この子のここをみてくれる?」と具体的に伝えます。学生さんもどうしてよいか分からないので、どうぞやってください、ではダメなんだろうと思います。それで、1対1対応したときに、帰りに学生さんの方から、「あの子はどんな子ですか?」という質問がくるんですね。「あの子は何が言いたいんですかね。」といったような、生徒に興味を持って帰られます。「この子についてくれる?」「この子に、ちょっと支援お願いしたいな。」というところで一つ変わるかな、というのがありますね。

③-T2

この主任教諭Bの語りから分かることは、学生が一人の生徒という具体的な対象への支援を教師から依頼され、その関係性においてその生徒に興味・関心を持ったり、責任を負ったりする「人と人とのつながり」、すなわち「外から内へ」の導入が変化を生む第一歩につながるものといえる。

Xさん(ボランティア学生)に、Pさん(生徒)の作文指導をお願いしたんです。Xさんは、Pさんとはお話しはできるんですが、いくら頑張ってもいつものPさんの拒否が始まり「作文は書かない。」となってしまったのです。Xさんは「済みません。」と、すごく責任を感じていました。あとから私がPさんに作文は書きますよと伝え、作文は仕上がりました。その内容を早くXさんに伝えたくて、「これ見てごらん。」とPさんの作文を渡しました。そこには「X先生と体育祭のことをたくさん話せて嬉しかった。」と書かれていたんです。Xさんに「これ見てください。あなたは最高の作文を生

徒に書かせましたね。」と言うと、Xさんは本当に喜んでいました。初回に書けなかった作文が、次のXさんとの対話で書けるようになったのです。その時からXさんは、「大きく変わったな。」と思います。

④-T3

Pは、書くよりも話すことが得意な生徒である。無理に作文を書かせることは、パニックを起こさせ、それを強いることは学生にとってはかなり困難なことだっただろう。しかし、生徒はこのような場面をしっかりと頭と心に刻み、X先生に申し訳なかった、話すことができたときは嬉しかったという思いを持って苦手な作文を書いている。学生のXさんは、あとからこの作文を読み、一面的な場面では読み取れなかった子どもの心に触れることができた。

このような生徒理解が学生ボランティアに大きな変化を生むものといえる。その裏には、このようなシチュエーションを見逃さずに、きちんと学生に伝えている担任教師の役割が見られる。この教師の見取りと学生への伝達行為は、教員を目指す大学生を育成するという意味においても大変重要な行為であるといえるのではないだろうか。

(2) 意識が変わった要因は何か

学生の意識が変わるのは、生徒との理解が深まった時である。自分の存在が生徒に認められ、求められていると知ったときに、学生は大きく変わる。主任教諭Cは、子どもとの約束、共通の話題で学生と生徒の関係が深まる様子を見事に捉えている。

それこそ試験で先週は来られなかったという時に、「先生来なかったのが淋しかった。」ということも生徒は言いますから、そういうこと一つ一つに喜ぶというか、おと

といこんな事があって先生に話したかったんだとか、先週こうだったけれど、結果はこうなったとか、そうした報告や学生とのコミュニケーションがどんどん広がっていくんですね、もうそうなったら学生さんは楽しいんだと思います。また来たいと思いますよね。早く来て生徒と対話したいと意識が変わるんです。

⑤-T 4

子どもとのコミュニケーションがうまくいくということが、学生の意識を変えることがうかがえる。しかし、学生によってはなかなか生徒とのコミュニケーションがとれない学生もいる。次のようなケースの場合である。

自分をなかなか表現できない学生がいますよね、うちの生徒たちもなかなか表現できないから、なんとなく表現できない者同士、なかなかコミュニケーションがとれないわけですよ。そうした中で、生徒が学生を支えているのかな、と思うことがあります。学生に支えられるのではなく、子どもが学生を支えている。ある学生はしゃべらないし、「何か困ってない？」と聞いても「何もない。」と応えるし寡黙だし、なぜ彼はこの学生ボランティアを選んでしまったのだろうと思うくらいでした。この子を教えてくださいと言っても、この子についてくださいと言っても、何だろう、まあ横にはいるんですが、なかなか自分の方から言えなくて、インパクトがないというか、ちょっと教員に向かないかなという消極的なところがありました。

ところが、生徒にも元気のいい学生のところへは行けない子どももいるわけですよ。Yさんとして。Yさんは学生Qさんとなら話ができるわけです。それで、Qさんに、「あなたは選ばれたよ。」と言いました。Qさんは、えーという感じではありましたが、それから変わりました。どんどんYさんに

入っていくんですね。お互いに会話はないんだけど、毎週彼が変わっていくんですよ。Yさんの力が彼を変えるわけです。会話はないのに二人とも。でもYさんがにこっとすると彼は自信がつくのか、どんどん変わります。Yさんのお母さんが、「明日は学生のQ先生が来る日ね。」とYさんに言うわけですよ。するとYさんはとても嬉しそうに明日は絶対に行くという表情をするそうです。担任の私が、そのやり取りが書かれたお母さんからの連絡ノートをQさんに渡すと、とても喜んで読んでいました。本人からは言葉では何も言われなくても認められているという安心感なんですかね。

⑥-T 5

この事例のように、学生の持ち味をどこで子どもたちが引き出してくれるかは分からない。学生側の資質・能力でレッテルを貼らずに、生徒との関わりの中で学生の良さが引き出され、自分の存在価値が高められていくことが見出されたケースである。

(3) 生徒からの影響はあったのか

学生が変わるということの大きな要因には信頼関係の構築が欠かせない。派遣初期の頃よりも子どもは学生がどんな人なのか、ということに敏感に感じ取るため、学生のところへどんどん行けるようになる。勉強の教え方がうまいとか、そういうことではなく、自分たちのことを分かってくれるという安心感がそのような行動を起こすのである。この子どもの行為こそが、学生を動かし、その変容をしっかりと主任教諭が見抜いていた。⑦-T 6の宿泊体験の事例はその代表的なものである。

パニックになっている子なんかは、「あっち行け、臭い、来るなー。」とか言いますから、そういうことも真正面に受け止めれば

学生はきついだらうなと思います。生徒Zさんが逃げようとする、学生のL先生が追いかけていくわけですよ。最初はZさんも「来んじゃねー。」とか言っていたんですが、後半は逃げていても顔がにこにこしているんですよ。それまでは、Zさんは、L先生に対して「あいつ嫌なんだよー。」と言っていたんですが、パニックになってL先生が追いかけてるのを諦めなかったものから最後には、あえてZさんがにこっと笑いながら飛び出すように変わっていきました。L先生もZさんも濃い一泊二日を過ごしたわけです。Zさんがパニックになったときには、最初はL先生は行けなかったんですよ。ぼくはもう…とね。宿泊を終えてからは、たとえば校内を走り回り、手あたり次第物をつかむと「投げちまうぞー。」と興奮しているZさんにL先生はもう行けるわけですよ。自信を持って。学生ボランティアは、なかなかそこまでは難しいじゃないですか。でも行けるわけですよ。そして、もっと対応が難しい別の生徒にも挑戦する。この変化は大きいですよ。

⑦-T6

とことん自分にかまってくれる人かそうでない人か、子どもは敏感に見抜く。この距離感を超えることのできた学生は、障害の有無に関わらず相手を理解することができるようになる。

同じ釜の飯を食べるような宿泊体験などは、主任教諭によれば、学生が生徒からの影響を受ける大変よい機会だという。

学生さんのメリットとして、若さはそれだけですごい力があります。休み時間に一緒に遊んでくれる人、鬼ごっこをしてくれる人、一緒に走ってくれる人など、本気になって関わってくれる人には、必ず寄っていきます。その時には、すでに子どもから人選というジャッジが下り、リクエストされているわけですから、子どもの影響力は

かなり大きいものといえるでしょう。

⑧-T7

自己都合を優先するとすぐ子どもに見抜かれてしまい、子どもの心を惹きつけることは難しくなる。⑧-T7のようなケースは、教師になってからもよく起こりがちで、採点があるからといって子どもと汗をかくことを後回しにすると、子どもが反抗的になったり、学級が乱れたりすることにつながっていく。

(4) 教員の影響を受けて学生が変容しているなど感じたことはあったか

以下のような教員側からのアプローチが学生の変容を促すことが分かった。

- 学生さんを生徒と近い距離になるようにご案内する。
- 昨日こんなことがあった、という情報を少しでも学生さんに伝えておく。
- 今日はそこはスルーした方がよい等、ほんの少し言うておくだけでも学生さんの救いになる。
- 学生さんの対応で良かったことは伝える。
例) 困っていたから、あのタイミングで声を掛けたのは良かったね、困っている時に動いたあの動きはナイスだったね、あのときはやれないわけじゃなくて、たまたま自分ができないから、待ってたわけでそれをきちんとキャッチできたよねなど。

⑨-T8

⑨-T8に示したことは、担任教師が意識して学生に伝えていることである。無償のボランティアとして来てもらっているということに対して応えていくには、学生が来てよかったと思える場を提供しなくてはならないということ

を、担任教師はしっかり捉えていた。

我々教員もそうですけれども、やっぱり認めてもらえているとか、頑張っているねとか、いくつになっても褒められるのは嬉しいですから。せっかく来てもらっているんだから、何してよいかも分からないという状況、それって子どもにとっても良くないと思います。せめて現場に入る前に、こういう学びのある学生さんたちが増えてくれるといいなと思います。

一番最初に来たときに、とりあえず否定的なことは使いません、もし立ち歩いていたら、ここに座りますとか、おしゃべりをしていたら、お話を聞いてくださいとか、すべて肯定的にお願いしますとは言っています。パニックになってしまった時に、攻撃的な言葉を言うかもしれませんが、意味のない行動はないはずなので、必ずそうなった時に、「なんだこの子は」ではなく、「どうしてなんだろう」、「どうして今私は押されたのかな」、「なぜ拒否されたのかな」等、その子には意味のある行動なので考えてください、と伝えました。学生さんたちは、すごくいい教員になると思いますよ。本当に自分のクラスで声なき子の、気持ちが分かる、あの子なんでだろうなという気づきができる教員になると思います。

⑩-T 9

A 中学校では、ボランティア学生は、“お手伝い”ではなく、“一馬力の教員”として扱われる。学生にとっても一人前の教師として扱ってもらえるのは嬉しいことである。生徒を任されることで責任も生じるし、担任の先生からも「子どもたちにとって来れば先生です。」と言われる。このような環境で学べるということが、学生一人ひとりの意識を高め、変容に導いたのである。

(5) 教員の影響があった場合、教員側はそれをどのように捉えているか

学生は、教員から直接影響を受けるというよりも、教員と生徒とのやりとりを見てその関係性に影響を受ける。それは、現場で起きていることが、まさに「いま、ここ」の真実であり、ライブそのものであるからだ。次の語りは、ボランティア活動が教育実習とは違うことを述べている箇所である。

教育実習と違って構える必要がないじゃないですか。学校へ行ったら即先生ですから。授業を考えたり指導案つくったりはないですが、即先生ですからね。そこは学生にとっては大きいと思います。ですから、こういう声掛けしてとか、あらかじめ考えておいた計画を実行するのではなく、何が起るかわからないから自分のひらめきがたよりなんです。ですから、声掛けがうまくいかなかったときに、どーんとぶつつかってくるだろうし、何気ない自分の言葉で変わるということは、まさにそこで起きているということが、刺激的なわけですよ。まさしく学生にとっては刺激的だろうなという気はしますね。

⑪-T 10

学校現場は、まさに刺激的である。一瞬たりとも同じではなく、対話一つで様変わりする。学生はまさに、この「人と人との関係」を学び、自己の変容につながっていくのである。

8 まとめと今後の課題

ボランティア学生が、特別支援学級に入って学ぶことは、教育の原点を知る大変貴重な機会となる。このことを特別支援学級の担任のインタビューより考察することができた。

特に、評価や単位の習得に関係のない形で実施されている神奈川大学のシステムの場合は、

学生の意志がその中心的な原動力となる。それを支える担任のきめ細やかな声掛け、個々の生徒への誘導、対話の意味、特別支援教育の視点からの助言、学生の優れたアプローチへのプラス評価など、担任の学生への支援はかなり頻繁に行われていることがわかった。

そして、その相互作用が特別支援学級で起きているからこそ、支援の意味が深く、自分の力がいかに無力であるかということに気づかされる。学生は、そこから何とか試行錯誤しながらも学びとっていくところに「教育とは何か」という根本的な自分への問い、すなわち「省察」が生まれる。

子どもたちの表現の裏にある真意を、しっかり受け止めるために、なぜそのような行動をとるのか考えよ、という大きな課題に学生たちは毎回ぶつかっていた。しかし、着実にその課題を克服する力も身につけてきた。

A中学校では、まず特別支援学級に入ってボランティア活動を行うことを、数年来継続している。半年くらいしたら自分の教科である社会や数学、体育を見に行きたいと特別支援学級の担任から言われ、行きたい教室を絞り込む。最初に特別支援学級に入るのは、一般級における配慮の必要な生徒への支援を学ぶためである。

まず、特別支援学級で子どもとのコミュニケーションの取り方を学び、一人前の教師として、しばらく生徒とのコミュニケーションの取り方を学んだ後に、一般級へ行くことになる。しかし、「行ってきます。」と勇んで一回くらいは行くのだが、次の時には「先生、ぼく特別支援学級がいいです。」と戻ってくるのとことである。担任としては嬉しい限りだが、その違いは何かというと、「一人の子どもとどう向き合うか」その原点を知ることには他ならないと主任教諭は言い当てた。

特別支援学級の担任の視点から見た学生ボランティアの成長が、学生の「知」を生み、地域で確実に育っている。このことは、大学生の教

員養成にもつながっている。

今後の課題としては、同一校内の別の担任の視点、他校に派遣された学生を持つ他校の特別支援学級の担任の視点から、比較的に分析していくことが必要であると考えられる。

教員の声掛けが、学生に影響を及ぼすことが実証できても、一教員の資質・能力が、ボランティア学生の学びの質に影響しているかどうかに関しては、十分に特定できなかった。

今後、さらに分析を重ね、比較検討したり、多角的な視点で調査を加えたりしながら、研究に広がりを持たせていきたい。

【注】

- 1 山本真由美 (2013) 『特別支援教育における学習支援ボランティア学生への学内支援体制について』 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部, 大学教育研究ジャーナル第10号
- 2 神奈川大学では、ボランティア活動を行った学生に対して、年度末に活動の感想をまとめた『学校ボランティア通信』を発行している。2月中旬には毎年、横浜キャンパスにおいて教職課程と卒業生教員の会である神大教員ネットワークの共催で教育研究交流会を行い、第一部を講演、第二部をラウンドテーブルとして学生のボランティア活動報告を基に関係者とディスカッションを行い、交流を深めている。
- 3 インタビュー項目は、学生を分析したもの
 - (1) 学生は派遣当初よりどのように意識が変わったのか
 - (2) 意識が変わった要因は何か
 - (3) 生徒からの影響はあったのか
 - (4) 教員の影響を受けて変容しているなど感じたことは

あったか (5) 教員の影響があった場合、教員側はその変容をどのように捉えているのか、について、又、大学におけるボランティア派遣制度に関する総合的な感想も含めて60分行った。

- 4 寺田容子, 秋元雅仁 (2008) 『特別支援教育体制における小・中学校と大学生との連携に関する考察』, 障害児教育実践センター研究紀要 第5・6号,13 - 24
- 5 黒住早紀子, 前川あさ美 (2008) 『学生支援者への支援—特別支援教育で大学がコミュニティに提供できること—』, 東京女子大学紀要論集,59 (1) ,147-167
- 6 『学校ボランティア通信』(横浜キャンパス) 2017年度 2018.2.17発行より引用 神奈川大学 心理・教育研究論集 第43号 2018.3.9 神奈川大学教育課程研究室 発行
- 7 今野邦彦 (2016) 『特別支援学校における学生ボランティア導入に関する調査研究 (2)』藤女子大学QOL研究所紀要 : The Bulletin of Studies on QOL and Well-Being,Vol.11, No1,Mar.2016
- 8 土居正博 (2012) 『特別支援教育関係ボランティアの課題と解決の方途』, 創大教育研究 第21号 : p171 ~ 182

Well-Being,Vol.9,No1,Mar.2014

- ・岩田吉生, 小田候朗, 青柳まゆみ, 飯塚一裕, 相羽大輔 (愛知教育大学) 萩原 拓, 齊藤真善, 蔦森英史 (北海道教育大学), 濱田豊彦, 澤 隆史 (東京学芸大学), 富永光昭, 井坂行男, 西山 健 (大阪教育大学) (2016) 『HATOプロジェクト構成大学における特別支援教育の学校支援ボランティアの実態』 障害教育・福祉学研究 第12巻,pp.179 ~ 183
- ・船橋篤彦 (2014) 『特別支援学校教員養成課程における実践的指導力の育成 (1)』 船橋篤彦 (愛知教育大学) 障害教育・福祉学研究 第10巻,pp.33 ~ 40
- ・熊 詩織 (2017) 『教員養成大学における特別支援教育の学校支援ボランティア活動の現状と課題』(2017) 岩田吉生, 障害教育・福祉学研究 第13巻,pp.137 ~ 145
『教育の学校支援ボランティア活動の現状と課題』熊 詩織, 岩田吉生, 障害教育・福祉学研究 第13巻,pp.137 ~ 145
- ・今野邦彦 (2015) 『特別支援学校における学生ボランティア導入に関する調査研究 (1)』藤女子大学QOL研究所紀要 : The Bulletin of Studies on QOL and Well-Being,Vol.10, No1, Mar..2015
- ・今野邦彦 (2017) 『特別支援学校における学生ボランティア導入に関する調査研究 (3)』藤女子大学QOL研究所紀要 : The Bulletin of Studies on QOL and Well-Being,Vol.12, No1,Mar..2017
- ・山本真由美, 長積 仁, 大橋 眞, 金丸 芳, 寺嶋吉保, 長宗雅美 (2009) 『特別支援教育における学生ボランティアの活用の試み』(徳

【参考文献】

- ・今野邦彦, 橋本伸也, 伊井義人 (2014) 『石狩市における特別支援教育学生ボランティアに関する調査研究』 藤女子大学QOL研究所 : The Bulletin of Studies on QOL and

島大学総合科学部・徳島大学大学院ヘルスバ
イオサイエンス研究部医療教育開発セン
ター) 大学教育研究ジャーナル第6号